

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

[昭和63年度]

1989・3

小松市教育委員会

市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

〔昭和63年度〕

1989・3

小松市教育委員会

例 言

1. 本書は石川県小松市教育委員会が昭和63年度に文化庁国庫補助金、県費補助金を受けて実施した市内遺跡詳細分布調査の報告書である。尚、この報告書は昭和61年度の分布調査に継続するものであるため、「市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ」とした。
2. 本年度の調査は北部地区の御館町周辺と東部地区の埴田町周辺、そして南部地区の南加賀古窯跡群（戸津町・上荒屋町・湯上町）、矢田野町と月津町周辺を対象として、小松市教育委員会職員があたった。
3. 遺物整理、実測、写真撮影については、北風阿意子、北風利義、松原修一の協力を得て、宮下幸夫、樫田誠、望月精司、石田和彦が行った。
4. 本書の執筆は、ⅠとⅡを樫田が、Ⅲ－4を宮下が、それ以外のⅢを望月が行った。
5. 本書の編集は執筆各員で協議して行った。
6. 報告書を作成するにあたり、次の方々に御協力、御指導を賜った。記して謝意を表したい。宇野隆夫、垣内光次郎、北野博司、木立雅朗、近間強、藤田邦雄、山本隆一（敬称略）

目 次

Ⅰ 北部地区の調査	1
1. 調査の目的	1
2. 遺跡の概要	1
3. 調査概要及び結果	1
Ⅱ 東部地区の調査	4
1. 調査の目的	4
2. 遺跡の概要	4
3. 調査概要及び結果	5
Ⅲ 南部地区の調査	8
1. 戸津地区の調査	8
2. 上荒屋地区の調査	13
3. 月津地区と矢田野地区の調査	15
4. 湯上地区の調査	16
5. 調査の成果	18

I 北部地区の調査

1. 調査の目的

小松市北部地区は、梯川以北の沖積低地を指し、手取川まで連続する広大な穀倉地帯を形成している。この地区は旧名板津村と称し、水田地帯として、長い間さほど大規模な開発が及んでいなかった。しかしながら、北陸自動車道の小松インターチェンジから国道8号線に向かって東西に走るアクセス道路が整備され、さらに、JR北陸線に新たな駅が設置されたことから、交通網を利用した様々な開発計画が急浮上してきた。

この地区は、その北半に高堂遺跡を中心とした根上町にまで連続する大規模遺跡が存在しているが、梯川に至る南半部は、遺跡分布が非常に希薄な区域である。しかしそれは、先に述べたように、長期間農業用地であったため、分布調査が充分行われていないことを示している。昭和62年、御館町地内の開発に伴う試掘調査で、中世の遺跡の存在が明らかとなった（御館遺跡）。従来より、御館という地名の由来を中世の居館の存在にあてる伝承があり、注視すべき区域と考えていた。今回の北部地区の調査は、新たに発見された御館遺跡の範囲確認を目的とした。

2. 遺跡の概要

御館遺跡は、個人企業の社宅建設に先だって昭和63年5月23日～8月13日にかけて発掘調査を実施した。調査面積は、375㎡と小規模であったが、幅5m近い大溝が3条、溝3条、土坑3基、井戸1基を検出した。時期は、おおよそ14～15世紀代を中心としている。ただ、建物跡が一棟も検出されず、遺跡の本体は不明であった。御館町地内には、西掘、東掘、馬場、城門等の小字名が伝えられており、本遺跡の南側も大門と呼ばれていたらしい。また、本遺跡の南の墓地では、以前おびただしい数の備蓄銭が出土したと伝えられ、銭畑遺跡として知られている。

銭畑遺跡は、一向一揆の大將蛭川心七郎重親の館跡とされている。これとは別に、この御館の地に、12世紀代の板津ノ介成景の居館の存在を推定しようとする考えもあった。しかし、調査で得られた資料からは、前者により近い年代が求められている。

3. 調査概要及び結果

調査の方法は、踏査及び試掘調査とし、周辺で将来的な開発の意向をもっている地主から承諾を得て実施した。試掘の承諾を得たのは、A～C地点の3ヶ所である（第2図）。水田区画一筆につき、1×2～4mのトレンチを2・3本設定し、地山面までの掘下げを行った。

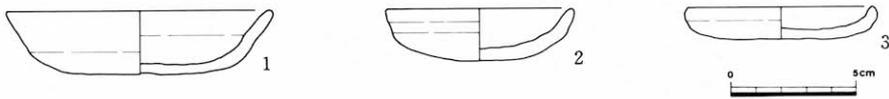
A地点：田面2筆に対してトレンチ5ヶ所を設定した。北側道路沿いで、御館遺跡の連続を確認したが、南半は急激に遺物を減じ、明確な遺構を検出していない。しかし、南方向に2筆ほど隔てた地区からは、古墳時代の土器の散布が見られる様になり、別の遺跡が展開するらしい。

B地点：田面2筆に対してトレンチ4ヶ所を設定した。遺物は、器種や法量の殆ど復元できない細片が僅かに検出されただけである。遺構は、水田関連の溝と考えられるものが数条確認されているが、居住域を示すような状況は認められなかった。

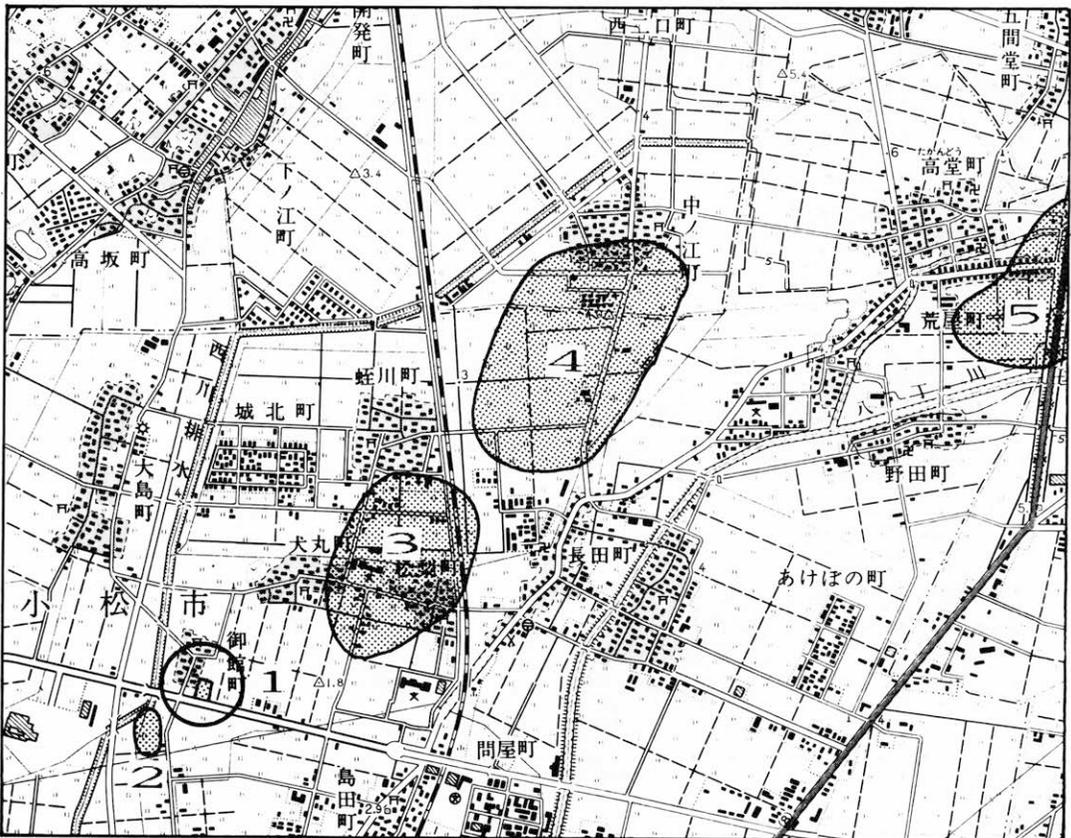
C地点：田面1筆と既存埋立地に対してトレンチ6ヶ所を設定した。水田側は、地山が砂質となっており、B地区と同じく、生活跡としての痕跡は認められなかった。遺物も流れ込みとしての細片でしか検出していない。

以上の調査によって、御館遺跡の東西及び南方向への規模拡大は予想し難いことが判明した。しかし、現在御館町の集落となっている範囲は、周囲よりやや小高くなっており、遺跡の本体と重複している公算が大きい。また、銭畑遺跡の伝承はほぼ確実と思われており、未だ遺跡の性格は確定できない点がある。

当該地区は、度重なる洪水によって、表面土砂の移動が激しく、踏査による分布調査が困難な状況にある。開発に伴う試掘調査の対応を常に細かく実施しておく必要がある。

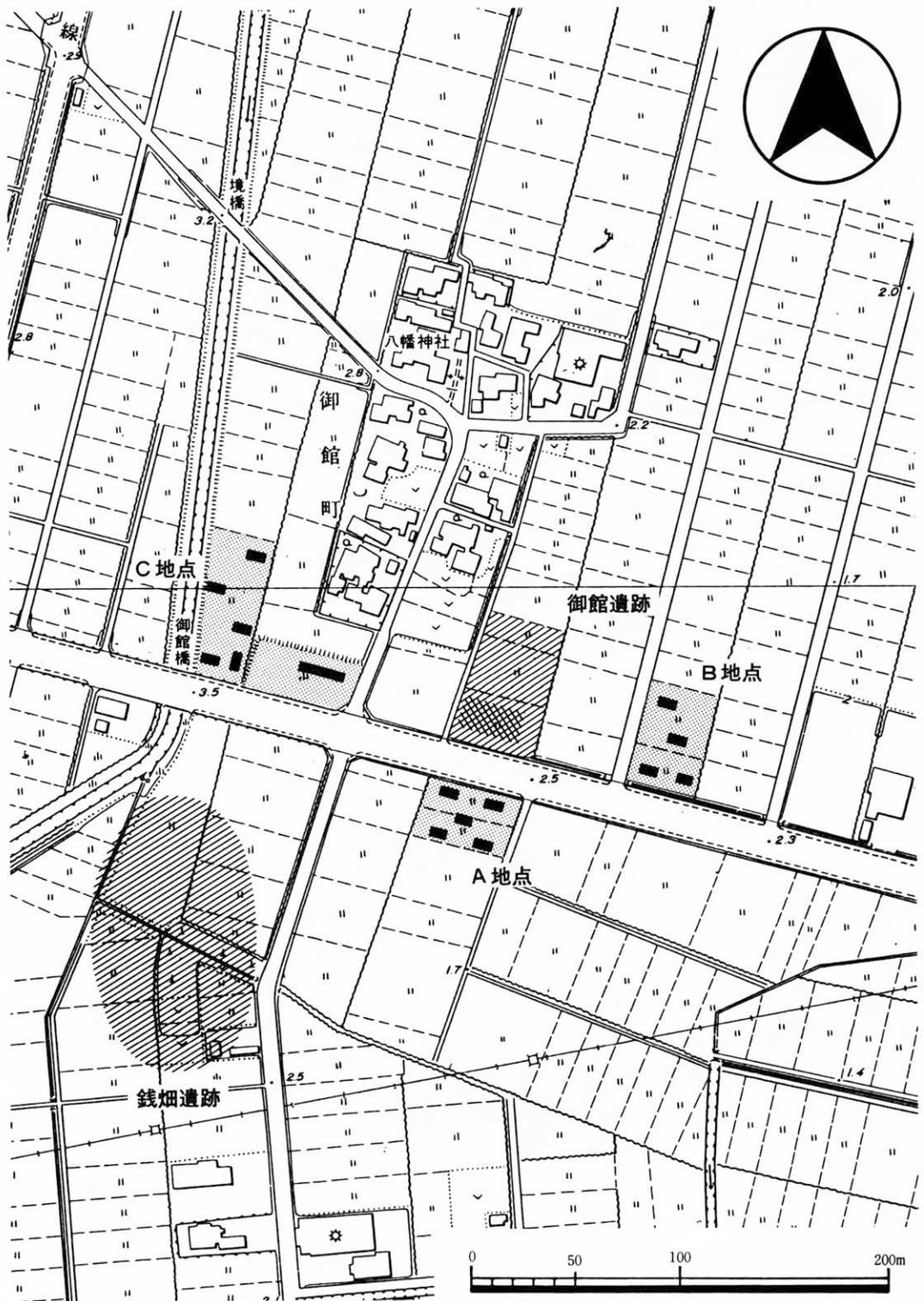


第1図 御館遺跡（1・2）、御館試掘A地点（3） 出土土器実測図（S = 1 / 3）



第2図 北部地区御館周辺の遺跡（S = 1 / 25000）

1.御館遺跡（中世）と分布調査区域、2.銭畑遺跡（中世）、3.松梨遺跡（不詳）、4.中ノ江遺跡（古墳）、5.高堂遺跡（弥生～中世）



第3図 北部地区試掘調査位置図

Ⅱ 東部地区の調査

1. 調査の目的

小松市東部地区は、梯川流域の広大な沖積平野と、それを囲む標高20～50mの丘陵地に区分される。この丘陵地は、能美丘陵の南縁部から、梯川を越えて木場潟背後の丘陵に至るまで、「小松東部丘陵地」と総称されて都市開発の主眼とされつつある。これは、低地での土地資源の枯渇による開発の自然増加以外に、加賀産業道路や小松バイパスという新基幹道路の完備に助長されている部分が多い。この先駆的な大規模開発が、小松東部産業振興団地の造成であった。当造成事業に伴う発掘調査では、周知7基の河田山古墳群が、最終的に62基におよぶ大規模な古墳群に変貌するという、丘陵地における遺跡分布の不確実さを露呈するものとなった。

以上のような、開発の増加と遺跡分布の不確実性に鑑みて、本年より、東部地区の丘陵地の詳細分布調査を実施することにした。今回は、河田山古墳群の南に近接する、埴田町の後山古墳群の規模確認を目的とした。

2. 遺跡の概要

梯川は、荒木田町付近でその流れを北から西へほぼ90度方向転換し、それを機に、丘陵地から平野部へと流域の環境を変化させている。埴田後山古墳群は、その屈曲部を臨む能美丘陵最縁部にあたり、丘陵本体とは東側を小谷で画された、標高18m程度の低い狭小な独立丘上全体を占有して形成されている。西側は、一旦、埴田町の集落となっている小谷を介して再び小規模な低丘陵地形となり、梯川右岸に広がる洪積台地（古府台地）へと連続していく。

古墳群の展開するこの独立丘は、ほぼ北西方向に主軸を向けた撓形を呈し、長さ約250m、最大幅約140mを測る。南側と東側は、丘陵縁をカットするかたちで住宅がせまっており、急崖を形成している。現況は全域畑地となっており、耕作による整地が著しい。

後山古墳群の名称は、昭和27年発見の後山明神1号墳と昭和29年発見の同2号墳、昭和57年調査の埴田無常堂古墳、さらに、昭和62年に発見、調査された後山明神3号墳の総称として、新たに付したものである（小松市教委1989）。同時に、「埴田無常堂古墳」の名称は「埴田後山無常堂古墳」に改変された。これは、後山明神古墳と埴田無常堂古墳が連続する同一の独立丘上にあり、さらに、その独立丘全体に古墳の展開が予想されたことから、両者に名称の関連性を持たせる必要があると判断したことによるものである。

本古墳群は、やや隔たった二つの時期の墓域と位置付けられる。一つは、眉庇付冑や短甲、そして四獣鏡などが出土した、後山無常堂古墳第一主体部の5世紀中葉で、後山明神2号墳も副葬品内容の類縁性から、それに近い築造時期が与えられるかもしれない。それ以後約1世紀ほどおいて、後山明神1・3号墳、無常堂古墳第二主体部等箱形粘土槨を内部主体とした後期古墳の展開がみられる。近隣の河田山古墳群との関係では、前者が時期的に重複を見せ、副葬品内容の比較から、河田山古墳群より上位にたつ被葬者の墓域と位置付けられる。6世紀代の後者は、河田

山古墳群との重複は無く、近隣での当該期古墳の展開は不明な点が多い。

3. 調査概要及び結果

分布調査は当初、この独立丘全体を1mコンタで地形測量することを目標としたが、時間的な制約から、北西半部に留まった。測量調査は、11月28日から12月13日にかけて踏査を交えて実施した。測量は、1/40の平板測量とし、1mコンタでは表現できない古墳の痕跡を示す微妙な盛り上がりは、模式図的に書き込んだ。

測量と表面観察によって、既知の古墳を含め、測量区域内に6基の古墳の存在を想定できた。それぞれの規模は計測できないが、さほどかけ離れた大きさのものは無いと考えられる。位置が確定しているのは後山明神3号墳のみで、そのほかについては、A～Eの記号を付した。南西部のC～Eの内、いずれかが後山明神1・2号墳に該当する可能性が大きい。

立地としては、B～Dが丘陵頂部に位置し、A・Eそして3号墳がそれを取りまく斜面部に位置している。C・D以南の宅地として削平された区域でも、北斜面と同様の展開が予想される。

また、測量区域外であるが、無常堂古墳に接する位置で、周溝の断面を発見している。

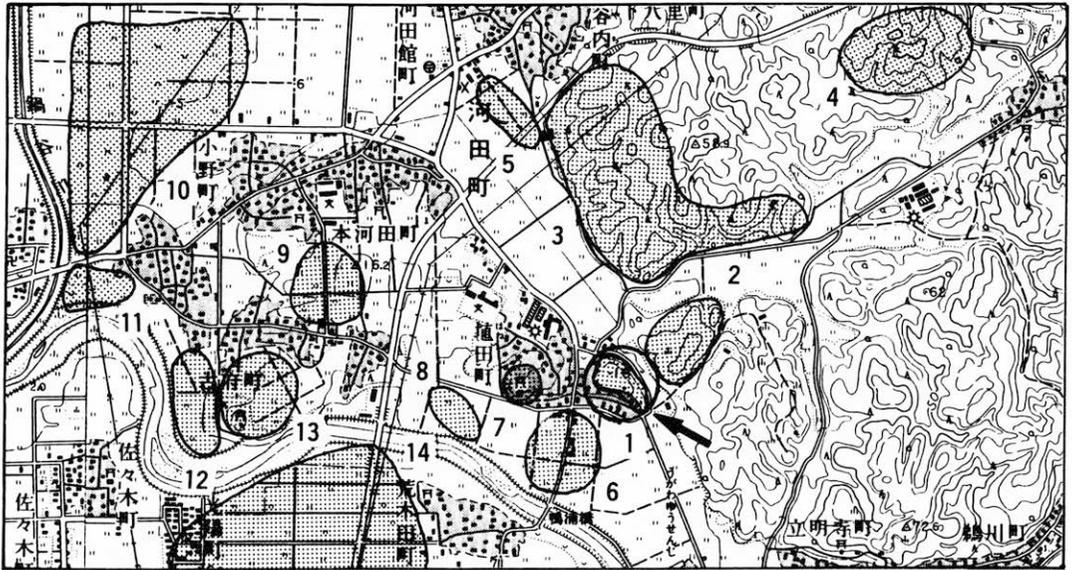
表面採集されている遺物は、殆どが細片である。資料の時期は3つに区分でき、古い方から、月影式期、高島式期の各土師器、そして6世紀代の須恵器である。前二者は、後山明神3号墳の調査で明らかになった、丘陵上に展開する該期集落(?)に伴うものである。6世紀代の須恵器は、古墳Aの地点で特に集中して採集されている。実測できたのは、2点のみ(第4図)で、1は推定受部径15.8cmの坏身片、2は推定口径13.4cmの○の口縁部片である。6世紀の前半代に位置付けることができよう。この他、古墳Bの地点でも、内面に同心円叩き目を留める甕胴部片が採集されている。

以上のことから、この丘陵上に展開している古墳は、その大半が6世紀前半代の群集墳を構成しているものと思われる。具体的な須恵器の型式対比では、既知資料を含め、ほぼMT15～TK10に求めることができる。当該期の古墳は、能美地域の古墳群では決して多くない。ただ、少ないながらも知られている古墳が、江沼地域と同様に、箱形粘土槨を主体部としていることは、重視すべきである。

後山古墳群は、その発見経緯の多くが示すとおり、度重なる耕作によって徐々にその姿を失ってきている。当面大規模な開発は予定されてはいないが、こういった開墾の継続もまた、ある一定の限度をすぎれば、破壊に等しい開発行為であると言える。開発の性格から、緊急の調査対応はできないが、この分布調査結果をもとに、耕作状況の監視を継続的に行っていく必要がある。

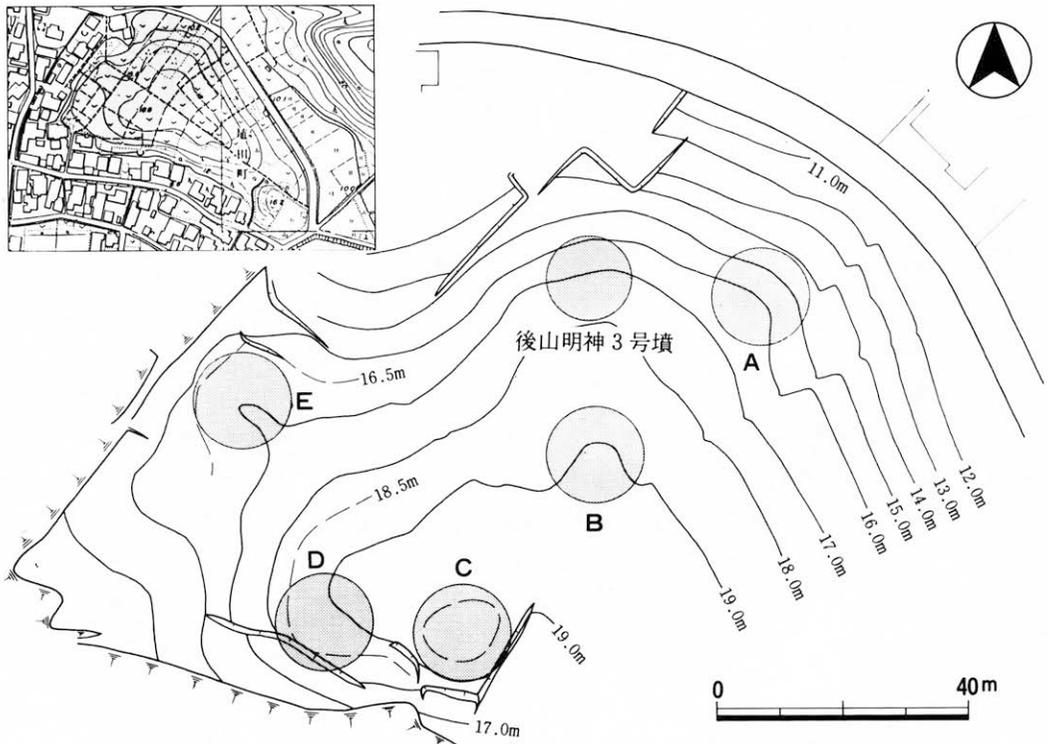


第4図 後山明神古墳A付近採集土器実測図 (S = 1 / 3)

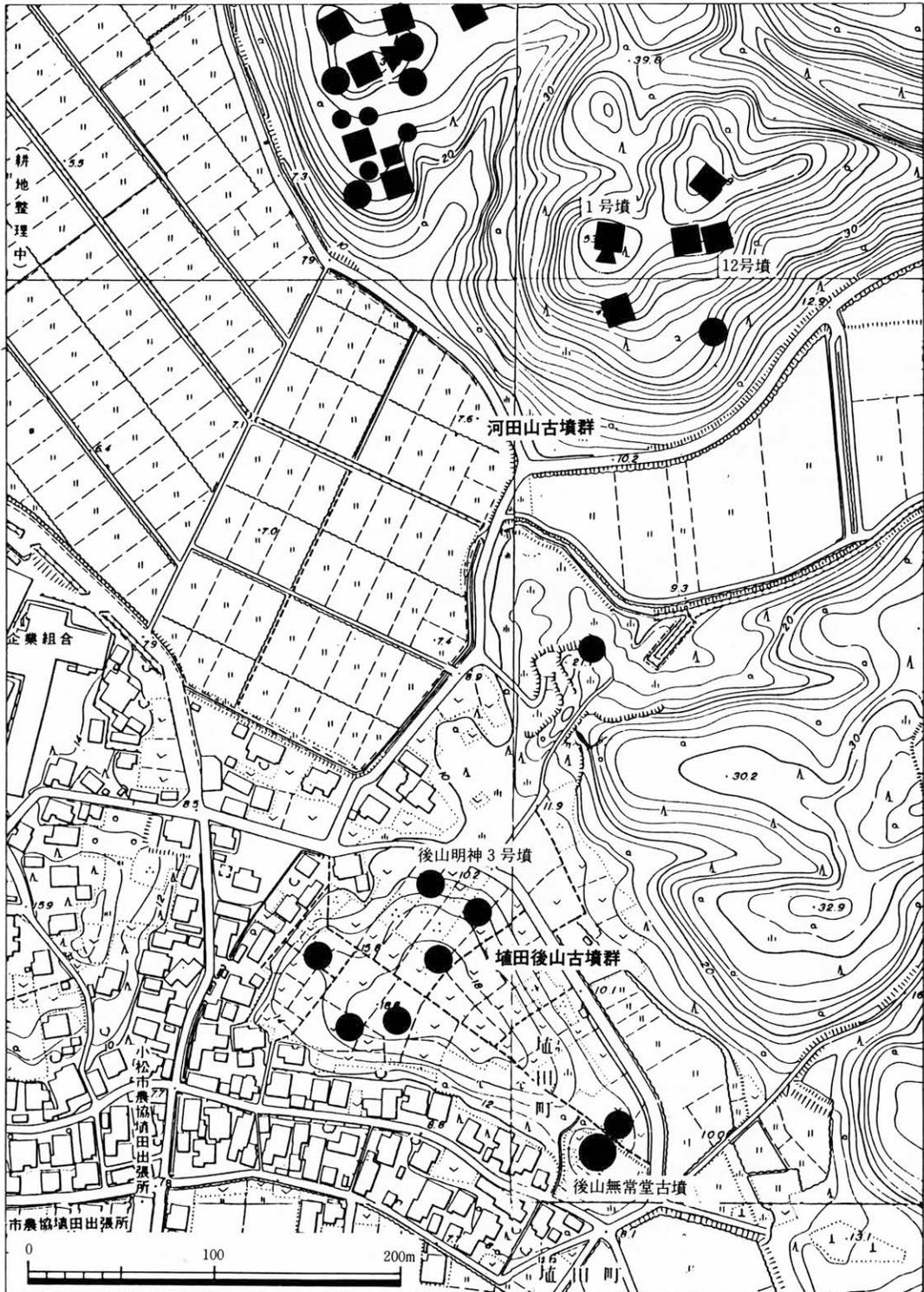


第5図 埴田後山古墳群周辺の主な遺跡

1. 埴田後山古墳群、2. 埴田山古墳群、3. 河田山古墳群、4. 上八里遺跡（横穴古墳・中世横穴・奈良窯跡）5. 河田C遺跡、6. 埴田遺跡（奈良～平安）、7. 埴田フルカワ遺跡（古墳）、8. 埴田ウラムキ遺跡（平安～中世）、9. 小野遺跡（平安）、10. 古府しのまち遺跡（古墳～中世）、11. 古府遺跡（弥生～中世）12. 古府シマ遺跡（平安～中世）、13. 南野台遺跡（縄文中期・古墳）、14. 荒木田遺跡（古墳～中世）



第6図 埴田後山古墳群測量図（S = 1 / 1200）



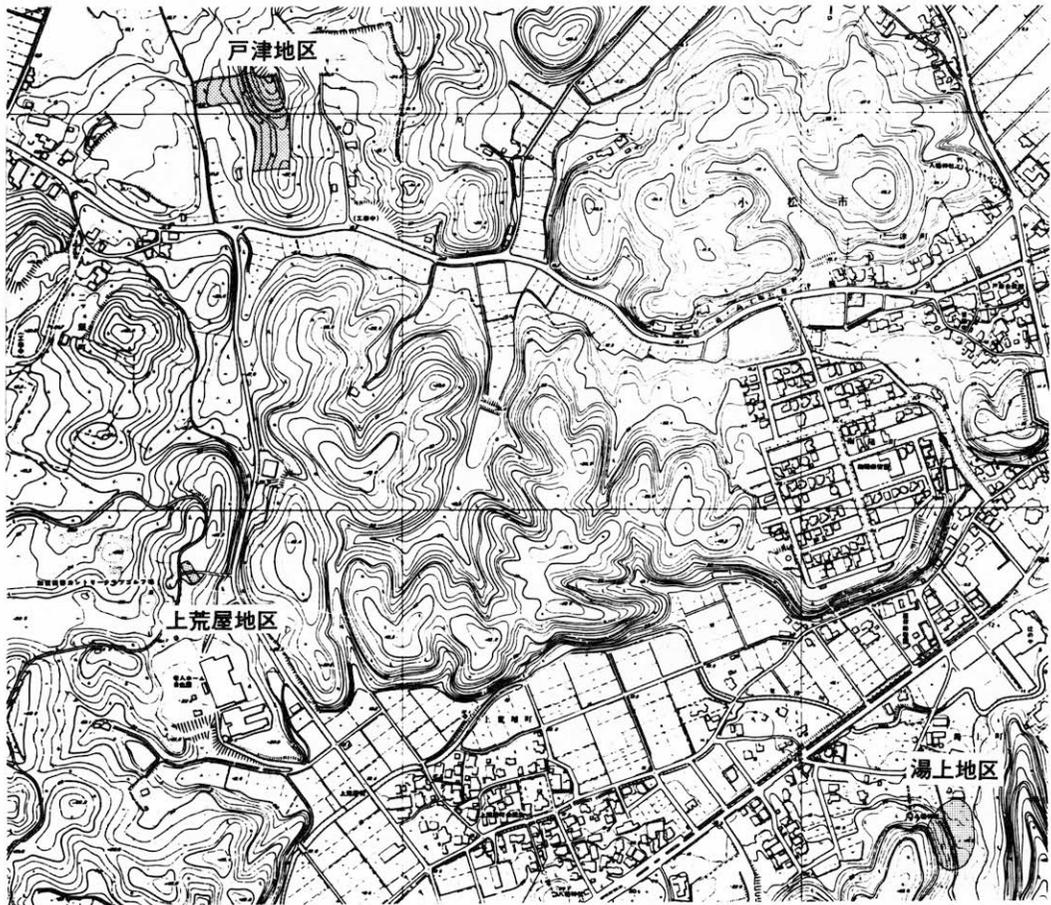
第7図 埴田後山古墳群と河田山古墳群 (S = 1 / 3500)

Ⅲ 南部地区の調査

今回、南部地区で調査した区域は、窯跡の分布状態の把握を目的として戸津地区、窯跡の破壊に伴って現状を記録することを目的として上荒屋地区、昭和61年度の分布調査で発見された窯跡の灰原の分布状態を把握することを目的として湯上地区の3地区を主体として、その他に念仏林南遺跡の範囲確認のため月津地区や矢田野遺跡の範囲確認のため矢田野地区の踏査も行った。

1. 戸津地区の調査

今回調査した区域は、東西に走る戸津のオオダニとそれから派生した小支谷によって分断された、南北に連なる標高40m程度の2つの低丘陵上に位置し、昭和61年度に分布調査を実施した区域と昭和61年度に発掘調査した戸津六字ヶ丘窯跡とに挟まれた部分を対象とした。現況は杉林となっている所であるが、北側の丘陵は以前果樹栽培を行った際の階段状の造成が行われており、決して良い保存状態とは言いがたい。調査は、事前に地主の承諾が得られたため、この丘陵造成時の段を利用してトレンチを29本設定し、造成断面を精査する形で、人力で調査を行った。



第8図 南部地区調査地域図 (1)

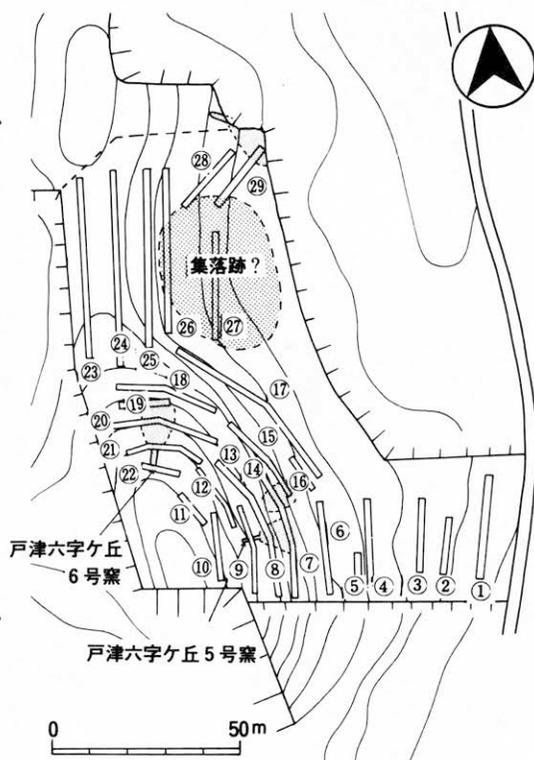
北側の低丘陵では、7～9トレンチの南側と19～22トレンチのほぼ中央からそれぞれ1基の須恵器窯跡の窯体断面と灰原が検出され、前者を戸津六字ヶ丘5号窯跡、後者を戸津六字ヶ丘6号窯跡とした¹⁾。また、戸津六字ヶ丘5号窯跡のやや北側、14・15トレンチでも灰原が検出された。この灰原は5号窯跡の灰原とは離れており、別の窯跡の可能性をもつものの、窯体が未確認であるのと土器が5号窯跡と同時期にあることから、5号窯跡の灰原である可能性の方が高い。

南側の区域は南側の丘陵につながる緩斜面が広がっており、この緩斜面上、26・27トレンチの付近から黑色土の落ち込みが検出され、それに伴って多数の土師器と須恵器が出土した。この落ち込みは、窯跡の灰原らしき土層ではなく、竪穴住居跡のような土層を示す。この周辺にはこの時期の窯跡群が密集している

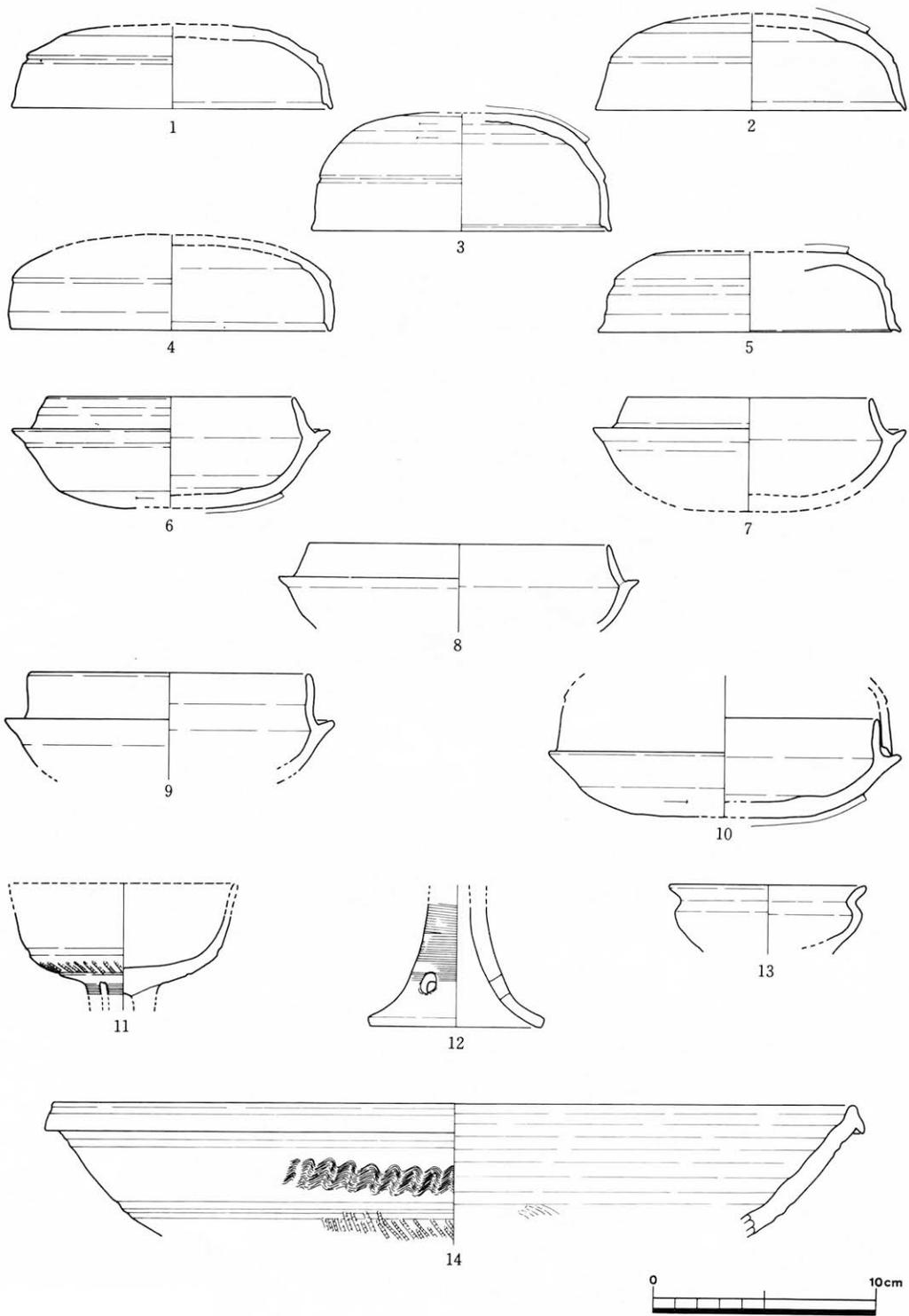
ことから、須恵器または土師器生産に拘わっていた集落遺跡である可能性が高い。また、南側丘陵の縁辺に当たる斜面、29トレンチの南側からは、灰原が検出され、昭和61年度に分布調査において発見された須恵器窯跡の灰原と推察できる²⁾。

以下に、各遺構ごとに出土遺物の説明を加える。

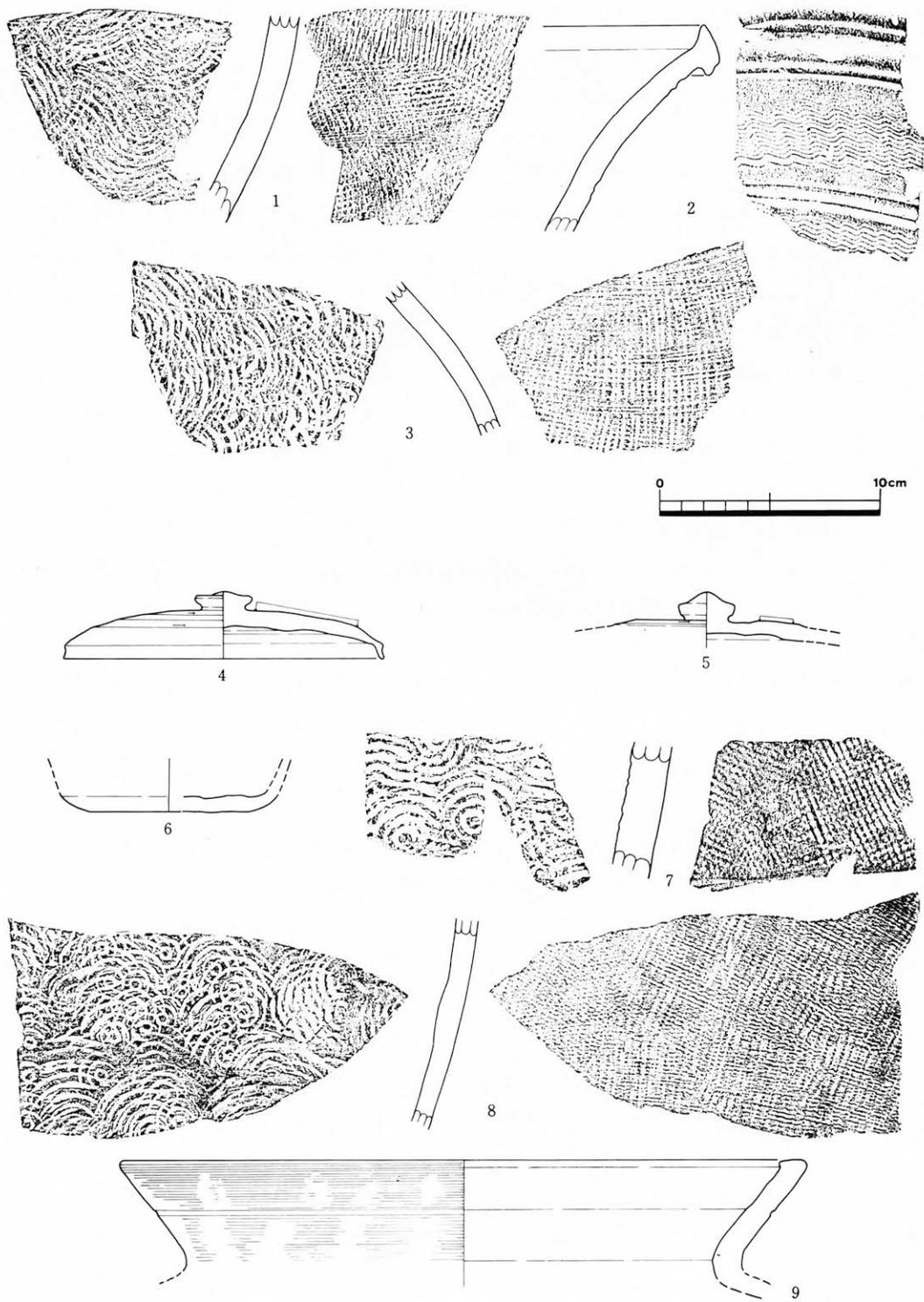
戸津六字ヶ丘5号窯跡出土遺物は、総て須恵器で、蓋坏、高坏、小型壺、器台、甕の器種が出土している。第10図1～5は坏蓋で、口径がそれぞれ14.2cm、13.8cm、13.4cm、14.2cm、13.5cmを測る。器形は天井部と口縁部の境に沈線状の稜をもち、口縁端部に内傾する弱い段をもつ特徴がみられる。天井部には総て回転ヘラ削りが施されるが、天井部のやや平坦な形態と天井部が丸く器高の高い形態(3)とがあり、前者が一般的である。第10図6～10は坏身で、口径がそれぞれ11cm、11cm、13.4cm、12.4cm、13.6cmを測る。器形は口縁端部に面をもたず丸く仕上げることで、受け部が短くシャープさを欠くこと、底部に回転ヘラ削りを施し平坦面をもつことなどの特徴がある。また、立ち上がりは内傾するものが一般的であるが、直立して長いもの(9)も存在する。第10図11・12は高坏の破片。11は無蓋高坏で、坏部下端に楕歯状の刺突文とそれに伴う2条の沈線が施される。脚部は長方形の透かしを3方にもち、カキ目調整が施される。12は脚部の破片で、円孔透かしを3方にもち、カキ目調整が施される。第10図13は小型壺と思われる。第10図14は器台の器受部破片と思われるもの。口縁端部は下端が突出して外傾する面をもつ。外面は楕描き波



第9図 戸津地区調査概要図



第10図 戸津地区出土遺物1) (S = 1 / 3)



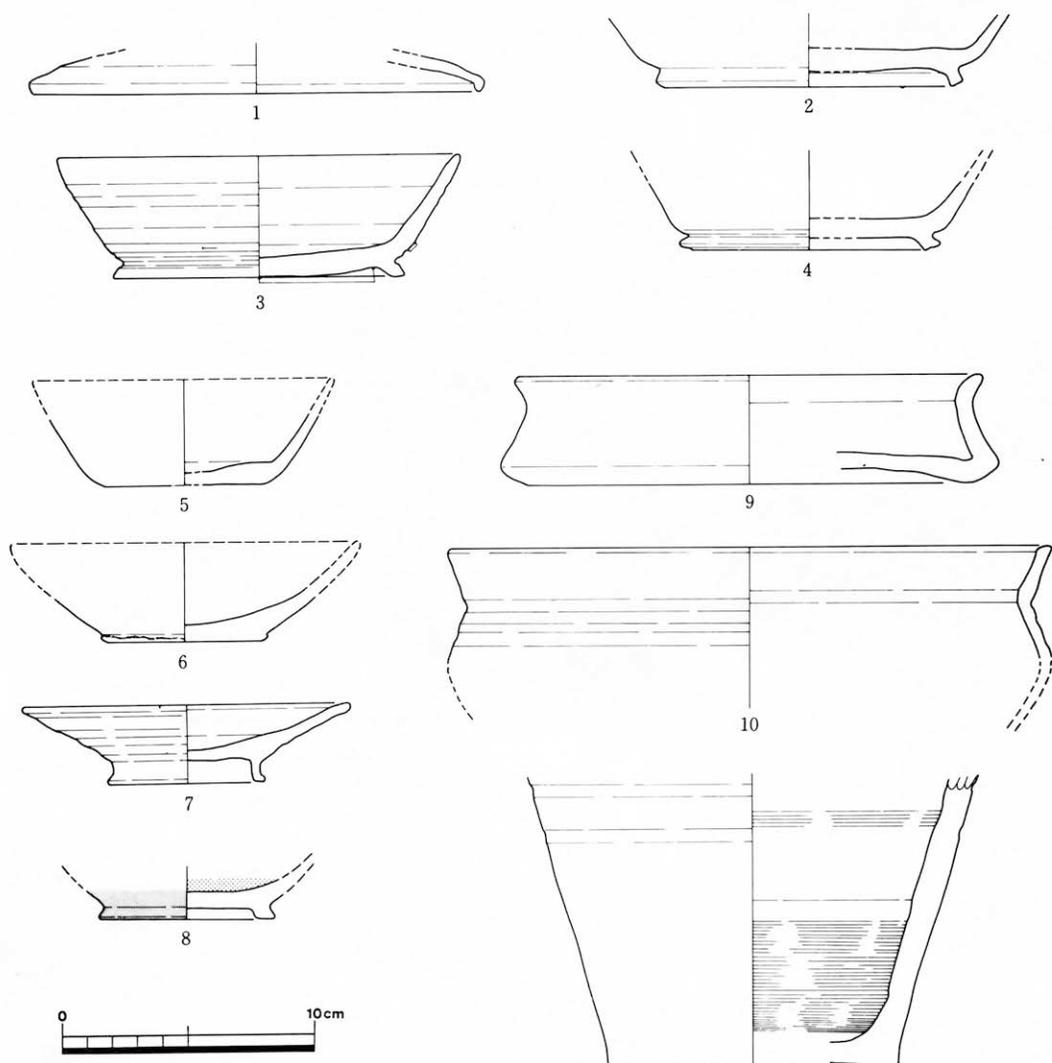
第11図 戸津地区出土遺物2) (S = 1 / 3)

状文と櫛歯状刺突文そしてそれに伴う沈線が施され、内面は下方で同心円文叩き⁽³⁾が施される。第11図1～3は甕の破片。2は口縁部破片で、口縁端部が上下に突出し、外面には2条の沈線で囲まれた中に櫛描き波状文が施されている。1・3は胴部破片で、外面に平行線文叩き(Ha)と内面に同心円文叩き(Da)⁽⁴⁾が施される。また、3には外面にカキ目調整、内面に3条の沈線が施されている。以上の戸津六字ヶ丘5号窯跡の出土遺物は、坏蓋の稜が沈線的表現に退化しているが、口縁端部の段はまだしっかりしていることや坏身の口縁端部には段が見られないこと、器高がやや低くなり口径が大きいことなど、二ッ梨東山4号窯跡最終床や二ッ梨殿様池窯跡と共通した様相を示し、南加賀古窯跡群の編年案I-1期、陶邑編年におけるTK10期にあたる。⁽⁵⁾

戸津六字ヶ丘6号窯跡出土遺物は第11図の4～9に挙げた須恵器だが、大半が甕の破片で、供膳器は極めて少なく、4・5の坏蓋と6の無台坏だけであった。4の坏蓋は折り返し口縁のもので、口径14.5cm、器高3.1cmを測る。口縁部折り返しは薄く長くシャープに仕上げられてあり、天井部は平坦部をもたず、回転ヘラ削りが広く施されている。5は天井部付近の破片で、やや平坦部をもち、回転ヘラ削りが施されている。鈕の形態は宝珠形を呈す。6の無台坏は底部付近の破片であるため、詳細は不明だが、体部が直線的に立ち上がる身の深い器形を予想したい。7・8は甕の胴部破片で、外面に平行線文(Ha)、内面に同心円文(Da)の叩きをもつ。9は甕の口縁部で、31cmの口径を測る。口縁部外面には中央に沈線とカキ目調整が施されている。これらの遺物から判断すれば、飛鳥IV期併行の時期、南加賀古窯跡群の編年案ではIII-2期をあてたい。

昭和61年度に発見された須恵器窯跡(窯跡番号未定)の灰原から出土した遺物は、須恵器の坏蓋、有台坏、無台坏、甕の器種が確認されたが、ここで図示したものは第12図1～4のとおり、坏蓋と有台坏のみである。坏蓋は1のような折り返し口縁のもののみで、口縁端部がやや短くて丸い形態を呈する。有台坏は底部が下に突出してヘラ削りを施す形態のもの(3)と底部が平坦で高台がしっかりと作られる形態のもの(2・4)とが存在する。時期は平城I期併行、南加賀古窯跡群編年案のIII-3期、その中でも古い時期に位置付けられるだろう。

26・27トレンチ付近の集落遺跡と考えられる区域から出土した遺物は、須恵器と土師器の比率がほぼ半々で、その時期もまとまりをもっている。第12図5～11に挙げたものがそうであるが、土師器は細片で摩滅が著しかったため、8の有台碗のみ図示できただけであった。この有台碗は内面を黒色塗彩、外面を赤色塗彩してある。図示できなかった土師器には、長甕や碗の類が出土している。8以外のものは総て須恵器である。5は無台坏の底部破片で、底部に回転ヘラ切り痕を残す。体部の立ち上がりから深身のものと考えられる。6は無台碗の底部破片で、底部に回転糸切り痕を残す。7は口径12.9cm、器高3.1cm、高台径6.1cmを測る有台皿で、高台の径がやや大きめで、しっかりとした作りをしている。9は焼台。口縁端部に釉や土器片が溶着しており、使用された痕跡がある。10は広口鉢の破片で、口径24cmを測る。11は双耳瓶の胴部下半の破片と思われるもので、内面にカキ目状の調整が見られる。以上の土器群は南加賀古窯跡群編年案のVI-1期の様相に合致するものであり、比較的単一時期としてのまとまりをもっている。

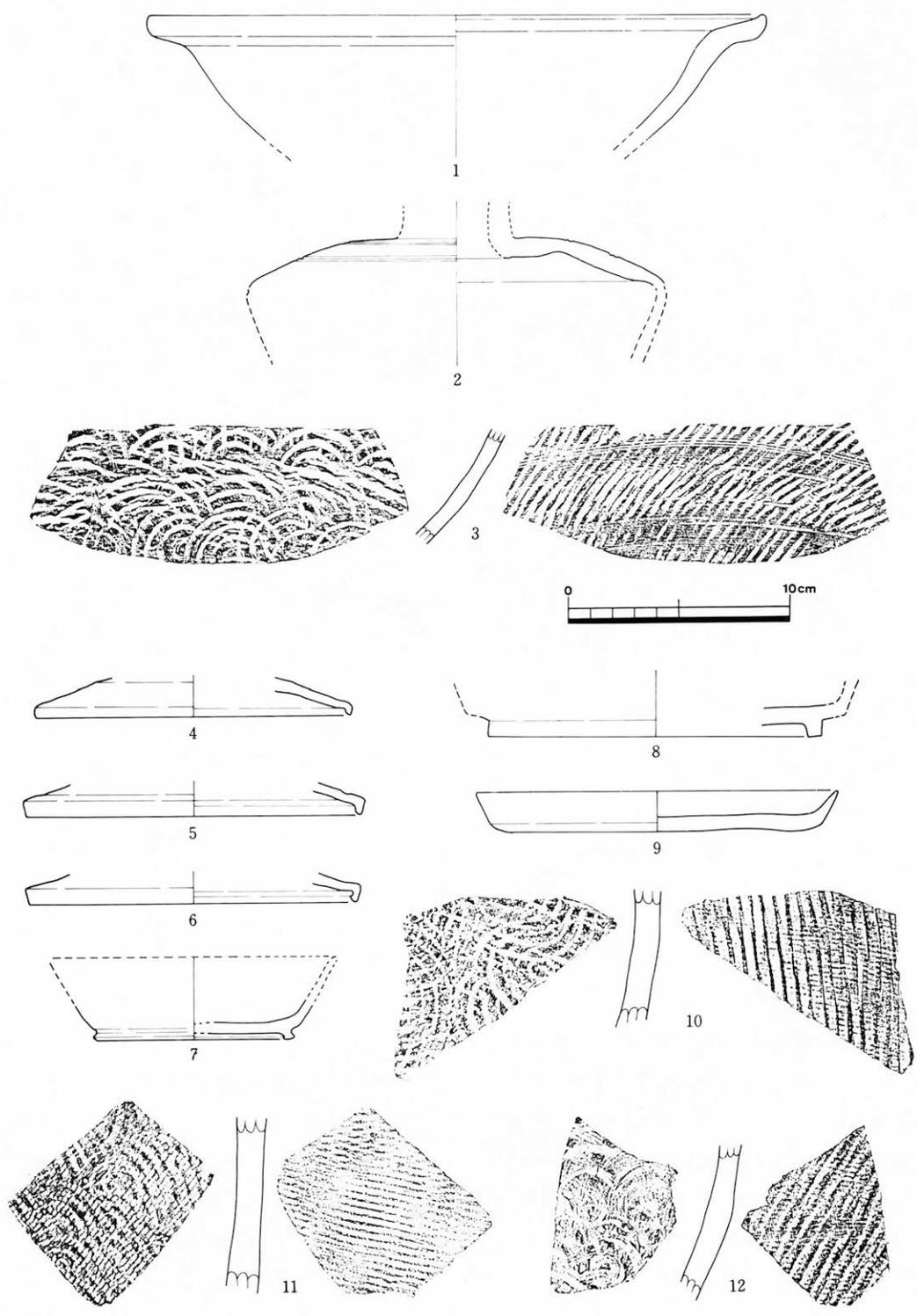


第12図 戸津地区出土遺物3) (S = 1 / 3)

2. 上荒屋地区の調査

この地区の調査は、加賀美容カントリークラブゴルフ場の取り付け道路工事の際に半壊された須恵器窯跡の精査と遺物の採集を主体として行った。この半壊された窯跡の発見は小松高校教諭近間強氏の分布調査によるもので、氏より小松市教育委員会が連絡を受け、今回の調査となった。

窯跡の位置は馬場川流域の上荒屋橋から美容カントリーゴルフ場へ入り込む小支谷の奥、老人ホーム自生園の北側、丘陵斜面に立地する。須恵器窯跡は取り付け道路の断面に2基露呈する。南側を1号窯跡、北側を2号窯跡とする。1号窯跡は、半壊されて露出した部分が、5m程度で、推定全長7～8mの規模をもつと思われる。窯体幅は焼成部で2m程度で、2枚以上の床が確認できる。床の傾斜は15～20度程度と緩く、窯尻で煙道が直立する形態である。2号窯跡は燃焼部



第13图 上荒屋地区出土遺物 (S = 1 / 3)

付近の窯体断面を確認できただけで、全長は不明である。断面での幅は2.5~3m程度で、2枚の床が確認できた。この下に続くと思われる灰原は、現状のまま保存されていると予想できるため、調査はしなかった。

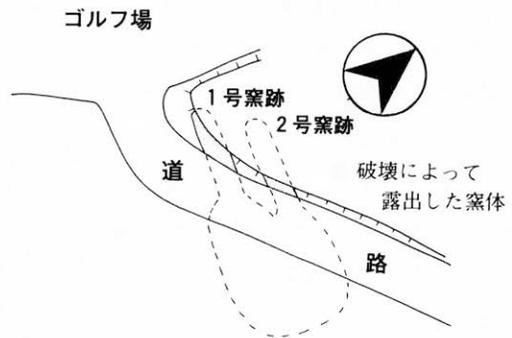
1号窯跡の窯体からは第13図1~3に示したとおり、須恵器の鍋、長頸瓶、甕の破片が採集できた。1の鍋は口径が27.8cmを測るもので、粒子の粗い混和材を含む胎土である。

2は長頸瓶の肩部破片で、2条の沈線を2段に施している。3は甕の胴部破片で、外面に平行線文叩き(Hb)とカキ目調整、内面に同心円文叩き(Db)が施される。2号窯跡の窯体からも甕の胴部破片が採集されたが、図示はしていない。第13図4~12の土器は、この1・2号窯跡が道路工事によって破壊された時に散乱したもので、2つの窯跡の製品を含んでいる。4~6は坏蓋の口縁部破片で14~15cm程度の口径を測る。口縁端部の折り返しは厚くシャープさはない。7は有台坏の底部破片で、高台が小さく、体部の立ち上がり部分はなだらかである。8は有台皿の底部破片で、しっかりとした断面方形の高台が付く。9は口径16.4cm、器高1.8cmを測る無台皿で、底部が厚く、体部の立ち上がりが短い。10~12は甕の胴部破片で、いずれも外面平行線文(Ha・Hb・Hcがある)、内面同心円文の叩きをもつ。内面の同心円文には木目が見られ、10・11の柁目状のもの(Dc)と12の年輪状のもの(Db)が存在する。以上のような極めて少ない資料から判断することは困難ではあるが、採集された須恵器を2時期に分けることはできず、1・2号窯跡はほぼ同時期の窯跡、南加賀古窯跡群編年案でのⅣ-2期頃の時期と考えたい。

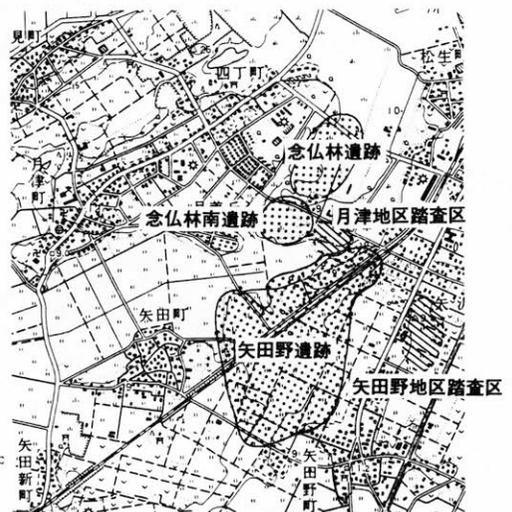
3. 月津地区と矢田野地区の調査

月津地区は念仏林南遺跡の周辺、主に遺跡の東側を対象としてその広がり具合を確認することを目的とした。調査は畑地を表面採集する方法を取った。その結果、念仏林南遺跡と同時期の須恵器や土師器の細片が少量採集された。今回の調査区域まで念仏林南遺跡が広がる可能性をもつが、遺跡の分布密度は希薄になっていると考えられる。

矢田野地区は矢田野遺跡の北東側を対象として、遺跡の広がり具合を確認することを目的として調査した。調査は畑地部分の表面採集といった方法を取ったが、今回の調査では遺物を採集することができなかった。



第14図 上荒屋地区窯跡分布図



第15図 南部地区調査地域図(2)

4. 湯上地区の調査

昭和61年度の分布調査で報告した湯上谷古窯跡を再度調査した。湯上谷古窯跡は、湯上町から南へ入る支谷の通称湯上谷の西側斜面に立地するわけであるが、その下方に存在すると思われる灰原がどの程度広がっているかを把握するため調査した。調査は、谷の水田及び畑を表面採集または一部試掘して、灰層の確認を行った。その結果、灰原の広がりは谷の中央まで及んでおり、純粋な灰層も残っていることが確認できた。

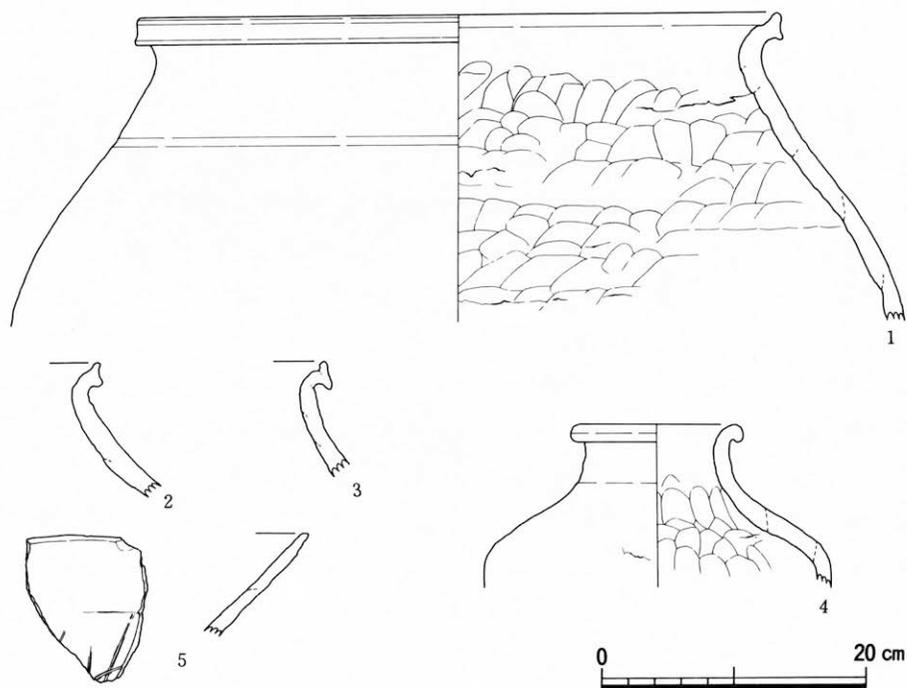


図示したものは、今回の調査で採集出来た土器（第17図）で、口縁形態の判明したもの及び押印（第18図）である。なお、押印 第16図 湯上谷古窯跡分布図に関しては、前回の調査で出土したものの説明にあたっては前1・前2のように呼称する。

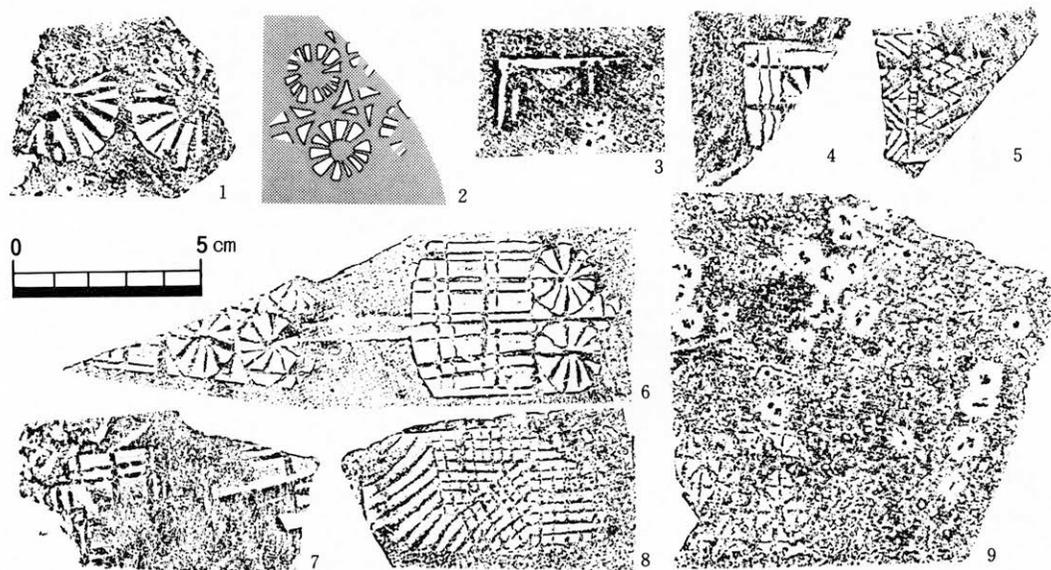
1は、復元径約47cmを測るやや大振りの甕である。2、3は甕であるが、大きさは判明しなかった。いずれも口縁はN字状を呈するもので、2は1・3に比べ縁帯がやや狭い。1には肩部に格子の押印が認められる。これは、前3と同じものである。4は、口径10.6cmを測る壺である。窯跡出土の壺は、カミヤ古窯跡にも認められるが、それ以前の時期の窯跡では認められない。5は、播鉢である。口縁端はほぼ水平になり、端部外面は指頭によりヨコナデされている。内面は緑配色の釉が付着していて、また、オロシ目が下より上へ施されている。

押印は前回の調査で8種類確認でき、その内7種類を図示したが、今回の調査で新たに8種類が確認できた。1は、菊花のみであり、この構成は一段と考えられるが単独であるかどうかは不明である。2は、釉が厚く拓本は無理であったので実測図とした。菊花二段で二列が確認できるがおそらく3列ないしはそれ以上の組み合わせと考えられる。菊花の間は直線で区切られる。3は、はっきりしないが前1の左の×印二段は同じとみられるが、上と左の区画線が違うものである。右は不明である。4は、菊花の一輪を上下に分け、中央の区画線を横にのばして全体を分ける線としている。区画線として左は三列、上は二列の凹線がみられる。これも全体のパターンは不明である。5は、前5の変形と考えられるもので、右は前5にみられた縦線がない斜格子であり、左は前5の組み合わせに一段増え、段の間の線が一本である。また、左右の区画の間に横線が梯子状にみられる。6は、上下二段に区画し、左は縦線と横線を組み合わせ、端を弧状にし、右は菊花を二列に配している。しかし、上のそれは同じ二列かどうか不明である。7は、一部であるのはっきりしないが、縦と横の線で構成されるものである。8は、複雑な構成である。右は弧状の平行線、左は格子、中央下半は弧状の平行線を延長してそれに反対の弧状の平行線を組み合わせた斜格子を配している。9は釉がかかっていて不鮮明であるが、前6で紹介したものと同じである。縦と横の線の正格子に斜線を組み合わせた押印の上段に二重の線で構成される斜格子の中に一重の線の斜格子を組み合わせている押印が認められる。押印は前回と今回で計16種類確認できたが、その他、近間強氏及び垣内光次郎氏によって更に数種類が確認されている。

前回、本古窯跡の年代について述べたが、カミヤ古窯跡の出土品との検討により、後出するものではなく、一部並行する年代観をもち、操業は相当長期間だったと考えられる。実年代については、今後の調査等を待たなければいけないが、一応13世紀後半から14世紀中頃と考えたい。



第17図 湯上谷古窯跡出土遺物実測図 (S = 1 / 5)



第18図 湯上谷古窯跡出土中世陶器押印文様拓影図 (S = 1 / 2)

5. 調査の成果

以上、南部地区の調査について述べてきたわけだが、幾つかの成果が得られた。

1つは南加賀古窯跡群では初源期に属する須恵器窯跡が戸津六字ヶ丘地区でも検出されたことである。今まで発見された二ッ梨東山4号窯跡や二ッ梨殿様池窯跡はいずれも二ッ梨オオダニの入り口に位置しており、ここから窯場が広がることを予想していたが、今回の調査で戸津地区の三湖台に面する部分でも操業を開始していたことが理解された。⁶⁾

2つは戸津地区の窯跡の分布状況の全様が明らかになったことである。戸津地区の窯跡は六字ヶ丘の平野に面する斜面で発生し、以後窯跡の存在しない時期もあるが、平城Ⅰ期の時期には戸津オオダニに面する斜面に窯場を移し、以後はほぼ連続とした操業を続けていたことが理解された。また、現在実施されている林地区の調査によって、南加賀古窯跡群編年案Ⅰ-4～Ⅱ-1期頃の須恵器窯跡が発見されており、明確な分布状況が解れば、戸津オオダニから北側に位置する窯跡の分布状況と窯場の移動の仕方がはっきりすると考えられる。

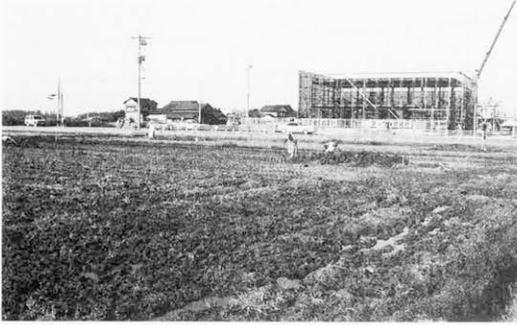
3つは窯業生産に関連をもつと思われる集落跡らしきものが発見されたことである。この遺跡は戸津窯跡群において須恵器窯跡と土師器窯跡の併存していた最盛期として位置付けられる時期のものであり、もし、工房跡などが発見されれば、極めて貴重な資料となろう。

4つは馬場川流域においても奈良時代後半には窯跡が存在していたことである。馬場川流域においては今まで平安時代中頃以降の窯跡しか確認されておらず、馬場川流域への窯場の拡大はこの時期以降とされてきたが、南加賀古窯跡群において窯場が全域に普及する奈良時代後半にはすでに出現していたことが理解された。⁷⁾

註

- (1) 戸津六字ヶ丘1～4号窯跡は昭和61年度までに既に発掘調査済みで、2～4号窯跡は報告されている（小松市教育委員会『戸津六字ヶ丘古窯跡—発掘調査概要報告書』1987）。
- (2) 『市内詳細分布調査報告書Ⅰ』小松市教育委員会1987刊のⅢ. 1. 戸津古窯跡群を参照されたい。
- (3) 甕の胴部叩き目文については、以後分類してあるものも含めて、内堀信雄氏の分類に従った。詳細については、（内堀信雄「須恵器甕類に見られる叩き目文について—北陸を中心として—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題—報告編—』石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 1988）を参照されたい。
- (4) 二ッ梨東山4号窯跡は1～4次床存在する窯跡で1次床はMT-15期に位置付けられる（一部資料を前掲資料編に掲載）。また、二ッ梨殿様池窯跡は埴輪を併焼する窯跡である。
- (5) 拙稿「南加賀古窯跡群の概要」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題—資料編—』石川考古学研究会 北陸古代土器研究会 1988。
以後南加賀古窯跡群編年案と記してあるものも上記から引用。
- (6) 近間強氏は「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」（『石川考古学研究会会誌第31号』石川考古学研究会1988）の中で、窯跡の発生地を二ッ梨地区の平野縁辺に求められたが、今回の調査で戸津六字ヶ丘地区の平野縁辺にも存在することが確認されたことにより、ここから二ッ梨地区までの平野縁辺においてMT-15～TK-10の未確認の窯跡がまだ存在する可能性をもってきたわけであり、生産規模もこの時期としては大きいものであったと考える。
- (7) 馬場川流域での操業は、奈良時代後半以後平安時代中期まで継続する可能性もあるが、一時的なものである可能性の方が高いであろう（近間氏前掲報告参照）。

追記：湯上谷古窯跡の押印で、前回報告した1は再度の検討により、上下が逆になっていたので説明も合わせて訂正したい。



御館A地点全景



同左調査風景



御館B地点全景



同左調査風景



御館C地点全景



同左調査風景



御館A地点出土土器

御館B地点出土土器



御館遺跡出土土器



埴田山古墳・後山古墳群航空写真 (石川県立埋蔵文化財センター提供)



河田山より見た埴田山・後山古墳群



埴田後山古墳群近景



地形測量風景



表面採集遺物



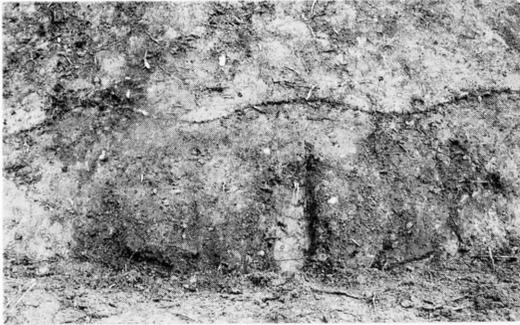
戸津地区全景



戸津六字ヶ丘5号窯跡灰原



戸津六字ヶ丘5号窯跡右横灰原



戸津六字ヶ丘6号窯跡焚口付近



戸津六字ヶ丘6号窯跡灰原



南側緩斜面全景



縦穴状落ち込み検出状況



試掘調査風景



戸津六字ヶ丘5号窯跡出土坏蓋



戸津六字ヶ丘5号窯跡出土坏身



戸津六字ヶ丘5号窯跡出土高坏



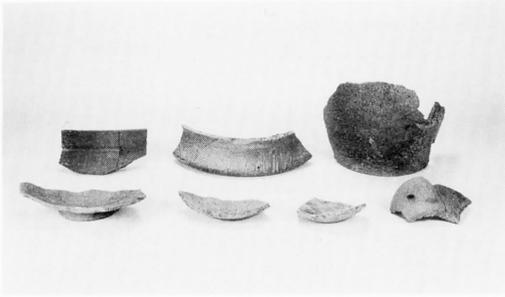
戸津六字ヶ丘5号窯跡出土器台・甕



戸津六字ヶ丘6号窯跡出土須恵器



29トレンチ検出の灰原出土須恵器



戸津南側緩斜面出土須恵器



戸津南側緩斜面出土土師器



上荒屋地区全景



上荒屋地区調査風景



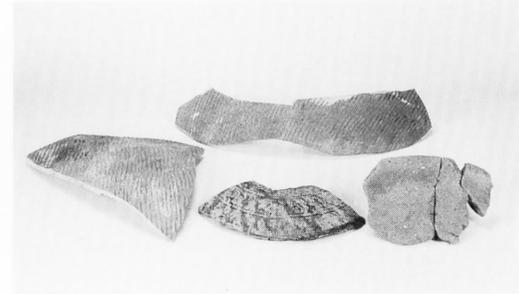
1号窯跡近景



2号窯跡近景



上荒屋地区出土須恵器





丘陵斜面遠景



調査風景



遺物出土状況



大甕片



壺・搦鉢片



押印のある大甕片



市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ

発行者 小松市教育委員会
〒923 石川県小松市小馬出町91番地
TEL (0761) 22-4111

発行日 1989年3月31日

印刷者 アイワ印刷

